

Title	巻頭言 : 看護ケアの質向上をめざして
Author(s)	安藤, 邦子
Citation	大阪大学看護学雑誌. 1997, 3(1), p. 1-1
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56855
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

巻頭言

看護ケアの質向上をめざして

LOOKING FORWARD TO IMPROVE QUALITY OF NURSING CARE

高齢化の進展、医療サービスの高度化・多様化に対応出来る質の高い看護職員が求められ、量の時代から質の時代と言われて久しい。

量から質の転換はあらゆる産業で優先して実施されてきた。時代の要請である。

高度成長の時代が過ぎて、バブル経済が音をたてて崩壊し、世間では倒産、リストラ、特に女性の就職難と、世の中は相変わらず不景気風が吹きまくり、出口がなかなか見えてこない状態が続いている。

看護をとりまく社会状況は、我々が考える以上の速さで変容している。ヘルスケアは疾病中心からセルフケア、健康志向の意識が高まって、役割が拡大するとともに変化し、社会から期待されて看護婦にとっていい風が吹いていると言える。

しかし、今後も出生率の低下、労働人口の減少は確実であり、果して若者達が看護の道を目指してくれるだろうか。更に臨床看護を選択してもらえるかどうかは、看護婦が職業として魅力的であるかどうかにかかっているように思われる。

大学病院は教育と研究の場であり、先進医療を提供する場であるが、研究面にかかなりのウエイトが置かれているのではないかと危惧しているのは私一人だろうか。日常の臨床判断や患者家族への説明、医療技術の実施はおおむねは研修医に委ねられているのが現状である。

看護婦は患者の一番身近な存在として、24時間患者のそばで患者の不安に耳を傾け、きめ細かな説明や指導、安楽への援助、専門看護技術の実施、セルフケアへの支援など医療チームの一員として、調整役として、患者のあらゆる問題解決のために力を発揮しなければならない。

患者（人間）理解のために人間関係論や成長発達理論、ストレス理論、ニード論等々の学習を重ねるとともに、継続患者受け持ち看護方式を導入して個々の看護婦が看護に主体性と責任を持つ体制をつくってきた。

看護婦には更に経験と感性とが不可欠であると思うが、基礎教育の高度化と現任教育の充実、体制作り、社会への上手なアピール等が看護婦評価につながり、ひいては働いてみたい、働き続けたい魅力ある職業につながるものと思われる。

平成9年2月

大阪大学医学部附属病院

看護部長 安藤 邦子